

<報告>エドゥアール・セガンについて分かりつつあること

学習院大学 川口幸宏

(1)

そもそも私がエドゥアール・セガンの研究に関わるようになりしたのは、ちょうど、2003年初夏、ムジカ音楽・教育・文化研究所主催の「清水先生と行く『エミール』・セガン・21世紀平和への旅」の準備が進んでいた時のことです。私が1871年に起きた「パリ・コミューン」、とりわけその教育改革について研究を進めていると申し上げたところ、先生は、私をフランス語が堪能な人間だと大きな勘違いをされ、旅でパリに立ち寄る際に、セガンがイディオ教育を進めたビセートル院に行き、セガンの実践の場やセガンを顕彰している様を目に収めたい、交渉してほしいと言われました。そのときに私は、初めてビセートルという名を耳にしたわけです。「院と言われますが、どのようなフランス語綴りですか？」とお訊ねするという、まったく無知無識な状態でありました。先生のお答えは病院だと言う。ならばなぜビセートル病院と言わないのか、学生たちが家庭教師のことをカテキョ、塾講師のことをジユクコウと取ってことばを切り詰めるのと同じようなことをする人だな、と失礼ながら思ったものでした。でもそれは清水先生に固有のことではなく、障害児者教育史では通例となっていることをやがて知るようになるわけです。パリ地図を広げてビセートル病院を探しますがありません。「パリにはありませんよ。」「いや、パリです。」こんなやり取りをしながら、同時にビセートルという名前のフランス語綴りを探り当てインターネットで調べると、パリ南郊外に確かにあります。パリはセーヌ県に含まれますが、その隣県のヴァールドゥーマルヌ県クレムラン・ビセートルという街です。ビセートル城砦市というような意味です。そこは中世にちょっと風変わりな建築様式の宮殿が建てられたことから始まり、やがて宮殿が、重罪人を収監する監獄や下層階級の人々のための一般病院・精神病院、養老院などに転用されました。ヴィクトル・ユゴーの名作『ある死刑囚最期の一日』の舞台となっております。インターネットを探り探りして、そのようなことを知ることができました。もともとは宮殿であったのだからビセートル院でもいいのか、などと納得をしたものでしたが、・・・とまあ、「出会い」がこのような有様でしたので、あらゆるものが新鮮であり、その一方であらゆるものが理解するのに困難でありました。

私にとって新しい「発見」があると、そのたびに清水先生にファックスでお知らせします。先生のことばをお借りしますと、「それは常識ですよ」（つまり、先行研究で確認

済みのこと）であったり、「新しい情報です、ありがとう」であったりしました。作業が重なってきますと、「それは常識ですよ」という言葉に、ついムラムラとする、もって生まれた反抗心と言いますか、「常識というなら、覆してやろうじゃないか」という気持ちも沸いてくるようになりました。この性格が災いしてほとんど隠遁生活を送る昨今であるにもかかわらず、清水先生に対してこの困った性格をぶつけるようになってしまいました。どうやら、この頃から、私は、清水先生のお仕事の成就のために微力を提供する、すなわち黒子でいる、という立場から少しずつ抜け出ようとしていたと思います。

ところで、セガンの経歴に関わるいくつかの「常識」をここで羅列しますと、

1. セガンは代々医師を務めた家系の出である。つまりセガン家は名家である。
2. セガンは父親から『エミール』流の教育を受けて育った。
3. セガン家はロマン＝ロラン（ノーベル文学賞受賞者）家と親交があった。
4. セガンはオーセールのコレージュで、続いてパリのリセ・サン＝ルイで学んだ。
5. セガンは（初期社会主義の）サン＝シモン主義の積極的分子であった。
6. セガンはヴィクトル・ユゴーの同人の一員であった。
7. セガンはパリの法学部で学び弁護士の資格を持っていた。
8. セガンは文学者であった。
9. セガンはイディオの子どものための学校を独力で開設した。
10. セガンはサルペトリエール院とビセートル院でイディオ教育を実践した。
11. セガンは共和主義者として弾圧され、アメリカに亡命した。

だいたい、このようなところでしょうか。

『セガン 知的障害教育・福祉の源流—研究と大学教育の実践』（清水寛編著、全4巻、日本図書センター、2004年）の第4巻にセガンの年譜（フランス時代）を執筆させていただきましたが、その執筆の過程では上記の「常識」を「覆す」だけの十分な史料を収集することができませんでした。ただ（4）（6）（10）（11）については「常識」のよって立つ「証拠」が不十分ないしは論理が成立しないということで、年譜上では表現をあいまいにしたり、訂正したりしております。（4）は「オーセールの公立コレージュ、パリの王立特級コレージュ・サン＝ルイ」、（6）は論理的にはありえない、（10）は「フォブール・サン＝マルタン通りの不治者救済院とビセートル養老院」、（11）は「言論・社会運動の自由とイディオ教育実践の新たな可能性を求めてアメリカに移住」というような内容にしております。なお、（7）については、当時知りえたセガンの経歴から

言えば、矛盾が生ずる旨の疑問を書き添えておきました。

(2)

じつは『セガン』の編集・執筆作業を終えてからが、私にとっては本格的な研究の出発と言えます。「終わりは始まりの第一歩」というところでしょうか。これまで収集してきた史資料の再整理、セガンのいくつかの原典の精読、関連する文献の収集など、半年ほどは文献による「常識」の裏づけやその逆の「覆す」論理と資料的裏づけの作業を行い、2004年10月11日、2005年2月3日に、計5週間にわたって、生誕の地クラムシー、学業の地オーセール、そしてパリで現地調査、文献調査等を行いました。その結果、これまで未発掘であった公文書などを閲覧することができました。その成果を簡単にまとめたのが「セガン略年譜」です。先の(1)から(11)を根本から覆すほどのことはありませんけれど、年表という形で表しますと、『セガン』に執筆した年譜は大幅に書き換えなければならない、という結果を得ています。

以下が、現在のところ判明していることを簡略にまとめたものです。

1. セガン家は代々医師の家系というのは誤り。新たに分かったことはセガンの父方の祖父—薪材商人—は、クラムシーの人ではないこと、セガンが生まれる前に父方の祖父母とも亡くなっていること、父親は風土病との医学博士としての戦いを胸に秘めてクラムシーの医師となったこと、母親はオーセールの商人の娘であったこと。セガンの父親の土地資産は60ヘクタールあったが、セガンが渡米したころから急激に売却が進められ、父親が亡くなった時にはセガンの生家のみが残っていた。それとてセガンはすぐに手放している。

2. クラムシーに最初の書店ができたのは1770年代のことであり、ルソーの『エミール』が書店に置かれたことは否定できない。ただ、『エミール』がクラムシーの人々に読まれたかという点、識字率から言ってありえない。セガン家は特権階級（有識者階級）であったから、セガンの父親（and/or 母親）が『エミール』を手にした可能性は否定できない。しかし、『エミール』流の教育がセガンになされたということについては疑問が残るところである。というのは、セガンは、その思春期において、当時の特権階級の中でも特権的な「学びの軌跡」をしており、そのためには『エミール』流の教育とは矛盾が生じるからである。

3. セガン家で晩餐会が開かれ、ロマン＝ロランの曾祖父がその様子を日記に綴っている。このことのみでセガン家とロマン＝ロラン家が「親交を結んでいた」とするのは短

格的過ぎる。晩餐会はフランス社会における特権階級の社交界であり、晩餐会に参加することは、いわば特権階級である証しである。なお、ロマン＝ロランの曾祖父はかつて市長を務めたこともある名士中の名士であり、公証人をしていた。ちなみに曾祖父のファミリー・ネームはロランではない。

4. 先の(2)に関わるが、クラムシーにあった唯一の公立コレッジに進まず、しかも、ニエヴル県の県都ヌヴェールにある王立コレッジ（ディジョン学区）に進まず、学区の異なるオーセール（パリ学区）の王立コレッジに進学。この学校をなぜ選んだのか、大変興味深い。オーセールには3年間在学し、パリの特級王立コレッジ・サン＝ルイの、なかでも超エリートコースであるグラン・ゼコールの予科クラスに進学。「数学特別進学クラス」であった。成績は極めて優秀。ただ、1831年には、後述のサン＝シモン主義「家族」の一員として位置づけられたことから、サン＝ルイ校における学業放棄の可能性も考えられる。グラン・ゼコールに進学できなくてもバカロレア（大学入学資格）は獲得できた。

なお、セガンより半世紀後の人であるロマン・ロランもまた、エリートになるための学業のためにパリに上っている。地方のブルジョア階級、知識階級等に見られた常態であった。

5. サン＝シモン主義「家族」における「第3位階」として位置づけられた。サン＝シモン主義「家族」は一種の宗教結社である。「家族」が「共同生活」をしていたモンシニ街の近くにアパート住まいをしていたことからみて、セガンがサン＝シモン主義「家族」に強く身を入れていたことは間違いない。しかし、「家族」はまもなく解体する。セガンは自らをサン＝シモン主義者であり続けたことを強調しているが、実態としてのサン＝シモン主義の哲学とセガンが言うところのサン＝シモン主義との間には、微妙ではあるけれども本質的な差異があるのだろうか。この差異についての検討が必要である。1835年にセガンは共和主義・社会主義・民主主義者の秘密結社「家族協会」に加盟している。このことが差異を生み出しているのではないか。

なお、サン＝シモン主義「家族」解体後、セガンは徴兵くじのためにクラムシーに戻っている。徴兵くじを引き当て、体格検査を受けるが「右手奇形にして身体虚弱」との診断が下されている。従軍するには差し障りはない程度のものであった。ただし、召兵された形跡は見当たらない。彼の体質にしてもこのあたりの事情についても、たいそう興味深い。

6. 1849年を境にしてヴィクトル・ユゴーの評価は二分される。1849年以前は非共和

主義の立場（多くは王政主義）である。1848年6月に起きた民衆蜂起の際、王の軍隊が民衆に銃を向けたが、ユゴーは民衆に向かって「労働者諸君、降伏したまえ」と言ったのは有名な話である。また、ユゴーは終生「無知蒙昧な民衆」に対して否定的であった。『レ・ミゼラブル』にもそれは現れている。ユゴーは知的障害者をそのままとして文学に表現していない（同時期、大衆に人気のあったウージェーヌ・シューは知的障害者を文学のテーマにしている）。このように、政治姿勢にも人間観においても、セガンとは接点がない。ただ、サン＝シモン主義者の集会は一般にも開かれており、多くの政治家・知識人・文学者など、特権階級が参加していた（「参会者」という）。ユゴーが「参会者」の一員であったことまでは否定できない。

7. セガンは法学部に在籍登録をするが、延べ11年間在籍し、未修了。したがって法学士を基礎資格とする弁護士資格は有していないと見るべきである。

8. セガンは文学を書き、生計を立てていた、とされてきた。『プレス』という新聞に、「芸術批評」を4本書いている。この頃、「芸術批評」というジャンルはまだ確立されていないから、セガンは、先駆的な仕事をしたことになる。しかしこれだけで生計が立つわけもなく、今後詳細に検討する必要があるだろう。

9. セガンは、学校設立の前に、アドリアンという子どもの教育・訓練を行っている。この成果に対して、ゲルサンという小児科の医師、エスキロールという精神医学博士の著名な二人によって「他の事例に適用可能である」という証明がなされた。おそらくそれがセガンをして本格的なイディオ教育開拓へと決意させたのであろう。公教育大臣に「直訴」をし、イディオ教育の場を作ること、その成果を権威ある公的な機関で検証してほしい、と訴えた。イディオ「教育」は専ら医学博士の手に委ねられていたことを突き破る瞬間である。こうして、法的な保護を受けたイディオのための私立学校が史上初めて設立される。これはフランス社会が、病弱児教育の組織化を手がけ始めていたことと連動していたことは看過すべきではないだろう。

なお、セガンが「イディオ者たちは教育され、療育され、改善され、治療されうるのだろうか？こうした問いを持つことがそのことを解決することであった。」と1866年著書で自らの実践を回顧していることに注目したい。「問いを持つ」ことが「問題を解決する」ことに繋がる、というのはけだし名言だと思う。ただし、「問いを持つことは問題を解決することでなければならない」とする（清水寛）のは、セガンの文言の深読みである。

10. 病弱児教育は病弱児施療院内に「学校」を設置し、医師・教師・宗教者によって進

められつつあった。一方、一般民衆のイディオの子どもたちは「救済院」という、「施療院」で見放された不治患者（「精神病者」など）や70歳以上の老人などを対象とした、今日で言えば医療福祉施設に収容され、医師による治療・訓練・教育・養育がなされていた。1830年代に入って、救済院内に「学校」が設置され、専ら医師による教育・訓練がなされていた。イディオ者を「動物的人間」と形容するような医学博士が教育・訓練に当たるわけであるから、症状の抑制、多少の改善程度が成果とみなされていた。セガンの私立学校での成果は非常に評判を呼び、パリの救済院・施療院（病院）を統括するパリ市民救済院総評議会は、不治者救済院に収容されているイディオの教育に当たるよう、セガンを「イディオの教師」として雇用する。イディオの子どもたちにも病弱児と同じく、教育の専門家の手に委ねることになったわけであり、福祉・医療と教育とが手をつないだ歴史的瞬間である。

9. 10 をトータルして見れば、セガンが述懐するように、「個人的なもの（アドリアンに対する私的実践）から社会的なものへ（私立学校、救済院・養老院に設置された「学校」での実践）、特殊な事例の救済に適ったもの（アドリアンに対する実践、私立学校の実践）から多くのイディオの願いに応じるもの（男子不治者救済院、ビセートル養老院における実践）」へと発展の軌跡を見せている。そのプロセスの中で、セガンは「これらの苦しむ人々の階級に適合されるものから人類の教育に適うものへ」との展望を次第に明らかにしていった（引用は1856年論文「イディオ者の療育と訓練の起源」）。それと同時に、私たちは、この軌跡を、フランス社会における教育・医療・福祉史総体で評価する必要があるだろう。しかしながらこの点に関しては資料の点でも十分に発掘が進んでいない状況である。現在のところ、概括的に説明できる程度でしかない。また、セガンのイディオ教育の場そのものの実態についても不明であるといわざるを得ない。

11. セガンが共和主義者であることを直接証明する史料発掘ができていない。それは、1848年2月革命によってフランス革命以降2度目の共和政政府が成立するプロセスの中で出された一枚のポスターである。1830年の7月革命では王政と共和政とが手を結んだ7月王政を生み出したが、そのことによって共和主義者等進歩主義者に厳しい弾圧が加えられるようになり、言論・表現などは「冬の時代」と言われるほどであった。ポスターは、それから得た教訓として、1848年2月革命によって作られた臨時政府の中に、教会や保守派に結託する輩がいる、と強い警告を発している。このポスターが危惧するように、第2共和政は「共和主義者のいない共和政」と後世言われるような実態を生み出し、言論・表現の自由を圧殺することに狂奔した。ポスターの署名者で有力な者

は国外追放などの弾圧が加えられた。セガンが直接弾圧を受けた証拠（裁判結果）はないが、同志が次々と弾圧され、あるいはそれから逃れるために国外に亡命するのを見て、セガンは、フランスに自由はないとみなし、また、イディオ教育についても医学界から迫害された経験から、アメリカに人格的自由とイディオ教育の確立を求めて移住した。ただ、セガンの1866年著書の「まえがき」では、直訳すれば「自らの意志で国籍を替えた」とあり、亡命とも移住とも取れる表現がなされている。

以上が現在のところ、セガンについて描くことができるアウトラインです。

(3)

ところで、今、私にとってたいそう関心があるのは、セガンが、私立学校の実践で高く評価され他国の関係者からも注目され始めていたにもかかわらず、パリ市民救済院総評議会の招致をどうして受け入れたのか、ということです。私立学校開設の10ヵ月後に「イディオの教師」として赴任するように言われ、それを受け入れています（実際に赴任したのはその1年後ですが）。私立学校を継続していたと考えていたのですが、彼が居住地を移していることを知った今では、私立学校は閉鎖したとみなさざるを得ません。その足跡は彼自身が回想しているように、「特殊なものから、多くのイディオへ適用」という事実を私たちに示してくれていますが、それは確たる見通しによってなのか、それとも別の要因による偶然の産物であるのか。いわば、セガンの人生選択の主体の問題について、関心を強く持ちます。

「今」という時を生きている者は、「明日」を推定で生きております。もちろん推定には、さまざまな選択肢を用意し叶うことなら確定的でありたいと願う主体があります。この主体、換言すれば、「明日」のためのモチベーションは何であったのか。私たちの明日が推定であるのに対し、過去は確定です。その確定を成し遂げた、すなわち歴史という大河の中で生き抜き、結果として偉業を成し遂げたセガンの主体を知ることができれば、時代・社会は違って生きている今の私たちにとって、いささかなりとも我が生き方をとらえ直す作業に繋がるのではないかと考えている次第です。

これらは、おそらくセガンの気性・性格にも及ぶ研究となると思います。歴史の大河の中で生きたセガンの心の中を覗く・・・きっと今の私たちに多くを語りかけてくれるものだと信じます。